

母性看護学実習における男子学生の思いと教育に関する文献検討

上野 典子¹⁾, 大澤 豊子¹⁾, 森田 桂子¹⁾

SBC 東京医療大学・健康科学部看護学科¹⁾

要旨

本研究は母性看護学実習における男子学生の思いと教育に関する知見を文献より明らかにし、教育方法の示唆を得ることを目的とした。医学中央雑誌web版とGoogle Scholarを用いて「母性看護学実習」「男子学生」をキーワードに検索し、研究目的に合致した14編を分析した。

結果として、母性看護学における男子学生の思いは、肯定的な思いと否定的な思いが混在し、否定的な思いは男子学生のモチベーションを低下させる要因となることから、実習前の準備段階で否定的な思いを肯定的な思いに転換させるような関わりが重要であった。

実習中・実習後の学修を促進する教員の関わりとして、指導者と連携し、学生が看護実践を通して母性看護の理解が深まるように、環境を整える。看護実践を振り返り、自己の内面に向き合い、看護実践を通して感じ得た母性看護について学びを深めるように支援することの示唆を得た。

キーワード：母性看護学実習，男子学生，看護教育

Perspectives and education of male students in maternity nursing practicum:

A literature review

Noriko Ueno¹⁾, Toyoko Ohsawa¹⁾, Keiko Morita¹⁾

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, SBC Tokyo Medical University¹⁾

Abstract

This study aimed to clarify the perspectives and education of male students in maternity nursing practicum and to gain insights into effective educational methods. A literature search was conducted on Ichushi Web and Google Scholar using the keywords “maternity nursing practice” and “male students.” The search identified 14 articles that met our research objectives. The results showed that the feelings of male students about maternal nursing were a mixture of positive and negative. Because negative feelings are a factor in lowering motivation, interacting with students in a way that would help them change their negative feelings to positive ones during the preparation stage before the practical training is important. As faculty members involved in promoting learning during and after the internship, we should collaborate with supervisors to create an environment where students can deepen their understanding of maternal nursing through practice. Support should be provided to encourage students to reflect on their nursing practice, face their inner selves, and deepen their knowledge about maternal nursing gained through their nursing practice.

Keywords: maternal nursing practice, male students, nursing education

I. はじめに

2017年日本学術会議¹⁾において、看護学は「自然科学と人間科学の双方の要素を持ち、健康に関連して人々が示す反応の意味を探索し、人々の生活を基盤として健康の維持増進、疾病予防、疾病回復への専門

的援助を探究する学問である。」と定義され、あらゆる発達段階・あらゆる健康の段階にある人間をとらえる支援、援助を通して関わりを持ちながら相手への理解を進めるという固有のアプローチ方法を有すること、学問と職業が密接に結びついている等の看護学固有の特性が提示された。臨地実習は既習の知識・技術・態度を統合するとともに、看護固有のアプローチ方法を学修する上で、欠くことのできない授業である。

平成元年の「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令の交付」（以後カリキュラム改正とする）によって、看護基礎教育において母性看護学実習は、男子学生、女子学生の区別なく実施されるようになった。母性看護学実習の意義は、妊娠・出産・育児期の母児とその家族の健康を保持増進するための能力を習得するだけでなく、性別をこえて、生命誕生の尊さや母子との相互作用を通じた学びなど、学生へ多くの貴重な経験的学修の機会となり、重要である。

一方で、男子学生が母性看護学実習に対する学習上の困難^{2,3)}や性差に関わる困難感⁴⁾を持っていることが報告されており、男子学生にとって母性看護学実習は困難を有する課題でもある。本学の教育においても性差を理由に、男子学生の知識不足や看護技術の未熟さが生じることのないよう、臨地実習に向けて、十分に学修準備を整えるよう支援に努めている。しかし、「同年代の女性患者に対しての援助は、かなりきまづい」「援助内容により拒否される」等、性差に関わる実習困難感が近年も報告⁵⁾されており、本学の男子学生も母性看護学へ苦手意識をもつと聞かされる。そこで、より教育実践に役立つような男子学生への具体的な教育方法について示唆を得るため、母性看護学実習における男子学生の思いと教育について、文献検討を行った。

II. 研究目的

母性看護学実習における男子学生の思いと教育に関する知見を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 用語の定義

- 1) 母性看護学実習：周産期の母子の看護を通し、対象者とその家族に必要な看護の基礎的な実践能力を臨地の場で養うことを目的とした科目。
- 2) 困難感：学生が実習前・中・後に生じる「苦手な意識」「実習が円滑にいかない思い」「苦しみ悩む思い」の感情。

3. 対象文献の抽出

文献検索は、医学中央雑誌web版とGoogle Scholarのデータベース検索により、2000年から2024年までに発表された和文の「原著論文」、「会議録除く」に限定した。キーワードは「母性看護学実習」、「男子学生」、「看護教育」とし、2024年4月に検索した。抽出された論文に対し、タイトルおよび抄録、本文から研究テーマから外れるもの及び重複論文を除外した論文を最終的に分析対象とした。

4. 分析方法

研究目的に従い、研究内容を類似性・相違性により分析し、母性看護学における男子学生の思い、男子学生の困難感、男子学生の学びの特徴、男子学生への教育方法の4つの観点から整理した。

IV. 倫理的配慮

文献を使用する際は出典を明記し、著作権の保護を遵守した。また、著作権を侵害しないよう、原論文に忠実であることに努めて引用した。

V. 結果

文献検索したところ、医学中央雑誌web版で27件、Google Scholarで30件ヒットした。そのうち、テーマから外れるものや研究対象者が看護学生でないもの、重複論文を除外したところ、最終的に14編を分析対象^{6～19)}とした。文献の概要を表1に示す。

表1 研究対象の文献の概要

著者/発行年	テーマ	研究目的	研究方法	結果・考察
A 林ら ⁶⁾ (2021)	我が国の母性看護学実習における看護学生における看護学生のストレスに関する文献検討	看護領域別実習の一つである母性看護学実習における看護学生のストレスについて文献検討を行い、効果的な実習指導への示唆を得ることを目的とする。	文献研究	母性看護学実習特有の看護学生のストレス状況として、母性看護の難しさ、看護過程への不安、母親・新生児の看護、男子学生特有の困難感、出産・育児経験の影響、母性看護への興味関心の低さなどがあった。教員や指導者は、学生個人の特性やレディネスを把握するだけでなく、実習前に母性看護学に対する捉え方を理解した上で母性看護学の特徴をイメージできるような演習をすること、実習中は知識と経験を結びつけられるような形でのリフレクションを行うことが望まれる。
B 坂本ら ⁷⁾ (2019)	男子看護学生の母性看護学実習における現状と教育的な関わりに関する文献検討	男性看護学生の母性看護学実習における現状について文献検討を行い明らかにする。	文献研究	文献7件の内容を分析したところ「男子学生の母性看護学実習の現状」「母性看護学実習に対する男子学生の思い」「母性看護学実習における男子学生への教育的関わり」の三つのカテゴリーが抽出された。母性看護学実習における男子学生の思いは、実習前、実習中と実習後にそれぞれ変化していることが示され、実習前には学生自身が自己の課題を明確にして実習に臨めるように支援する、実習中は、比較的関わりに制限が少ない新生児看護において主体的能動的に実習できるように教育的な関わりをするなどの示唆が得られた。
C 原ら ⁸⁾ (2019)	男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びの調査	男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びを明らかにし、今後の本学における母性看護学実習の教育的関わりを検討することを目的とする。	質的内容分析法	男子看護学生7名を対象として分析した結果、母性看護学実習に対する思いとして、実習前は【ネガティブな思い】が多かったが、実習後には【ポジティブな思い】が多く抽出され、【教科書的な学習内容と臨地実習での学びの一致】【他領域での母性看護学の活用】【父親になった時の母性看護学の活用】という学びを得ていた。今後の教育的関わりとして【直接見られない場合の対象の理解を促す関わり】【実習しやすい環境作り】【実習中の学習姿勢を示す関わり】が抽出された。男子看護学生が【ネガティブな思い】に直面した時、指導者は全てを教授する訳ではなく、学生自身で解決策を導き出せるような関わりが必要であると示唆された。
D 藤邊ら ⁹⁾ (2019)	母性看護学において男子学生が肯定的にとらえた体験	男子学生が母性看護学実習を振り返って、どのような時に肯定的な体験となったか明らかにする。	質的記述的研究	男子看護学生7名を対象とし、分析の結果、肯定的にとらえた体験は【自分が実施可能なケアを適切に行えた時】【分娩に立ち合い生命の重要性を感じたとき】【グループで協力し連携がうまくいった時】【妊娠褥婦に受け入れてもらった時】という4つのテーマが抽出された。男子学生は母性看護学実習に不安や戸惑いをもっていたが、肯定的な体験を得られるような調整や指導を行うことで学びを得られると考えられた。
E 大野ら ¹⁰⁾ (2018)	男子学生が抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因	男子学生が実習前から実習終了までに抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因を明らかにする。	質的帰納的研究	男子学生9名を対象とし、分析した結果、男子学生が抱いた実習に対する困難感の変化の様相は、「積極的姿勢へと変化」「困難感が継続」「実習前から消極的姿勢を示さない」の3つに分類された。「積極的姿勢へと変化」する様相には、急激に変化を示すものと、徐々に変化を示す2つのタイプがあった。急激に変化を示したタイプには、新生児の看護や分娩見学などによりもたらされた「感動体験」が影響していた。また徐々に変化したタイプには、「看護の方向性がみえること」と「対象から受け入れられているという安心感」が併存し影響を与えていた。また、積極的姿勢がみられたのは「看護者を目指す者としての意識を持った」時であった。男子学生が抱く母性看護学実習への困難感への支援では、「看護の方向性がみえる」こと、「対象から受け入れられているという安心感」を持つこと、さらに「男性としての自分」に集中しがちな意識を、「看護者を目指す者」としての意識へと移行させることが重要と考えられた。

表1 研究対象の文献の概要 (つづき)

著者/発行年	テーマ	研究目的	研究方法	結果・考察
F 贅育子 ¹¹⁾ (2018)	母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感、実習中の困難感、実習後の成長感と事前学習課題の理解度および有効性から考察した効果的な学習支援	母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感、実習中の困難感、実習後の成長感を男女別に明らかにするとともに事前学習課題の理解度を検討することを目的とする。	調査研究、自由記載について逐語録をテキストマイニングで分析	3年次女子学生92名と男子学生24名を対象に、実習初日と実習最終日に調査を行った結果、実習前の学生は、母性看護学の特異性や知識不足から生じる不安を感じ、実習中は記録が負担となっており、女子学生はアセスメントに苦慮していた。男子学生は対象者との関わりや実習環境にネガティブな感情を抱いていることが分かった。実習後は、対象者との関わりを通して母性看護に必要とされる知識の理解や、母親の偉大さや愛情を感じ人間の成長を遂げていることが覗えた。一方、実習前の自己学習の不足は記録に対する不安の要因となり、実習での学習効果を低下させ、実習の大変さだけが残り学生の人間の成長の妨げともなり得ると考えた。アウトプット型学習の有効性が示され、講義・演習・実習の連続性をふまえた学生の主体的能動的学習を可能とする母性看護学教授の必要性が示唆された。
G 嶺嶺ら ¹²⁾ (2017)	男子学生の母性看護学実習開始時における心理状態に関する研究	母性看護学実習開始時における男子学生の心理状態を明らかにし、具体的にどのような指導が必要であるか、その方法を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。	質的帰納的分析	4年生男子13名を対象に心理状態を分析した結果、【男性であることを意識した感情】【分娩に対する抵抗感】【母性看護学実習に抱く困難感】【母子の看護に対する不安】【母性看護学実習への期待感】【学生自身の経験からくる肯定的感情】の6つのカテゴリーが抽出された。男子学生は、母性看護学実習において性差を意識し、実習を困難なものにしていた。一方で、新生児のケアなどに対する期待感も抱いていた。今後は、学生の背景調査や母性看護学実習に対する学生自身の不安の把握が必要であり、そのためには不安の客観的指標の開発が求められる。また、実習以前の授業では、実践の場面に近づけた演習やロールプレイにより、母子の看護について具体的なイメージが持てるような指導方法が必要であることが示唆された。
H 二川ら ¹³⁾ (2015)	男子学生の視座から捉えた母性看護学実習における学習過程	看護系大学男子学生の母性看護学実習に対する準備状態と実習における学習過程を明らかにすることを目的とする。	質的帰納的分析	男子学生5名を対象として分析した結果、男子学生の準備状態は【性差に関する戸惑いと不安】【母性看護学実習への期待】であった。外来実習での学習は【妊婦と関わった安心感】【妊婦の気持ちと夫の役割】【性差を越えて関わることの困難さ】【産褥実習に対する心構えと不安】だった。病棟実習での学習は【性差に適した看護の気づき】【実践を通して理解した母性看護】【生命への畏敬】【他領域実習への学びの応用】だった。男子学生の学習効果を高めるには、学生の性差に配慮した教育的関わりが必要である。実習前には男子学生の情意面を捉えて動機づけにつなげ、妊娠から産褥への流れに沿った実習展開とし、対象との関わりを機会を多くつくることが重要であると示唆された。
I 小倉ら ¹⁴⁾ (2014)	A大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較	A大学看護学生の母性看護学実習前における自律性欲求・仮想的有能感(他者軽視、自尊感情)・学習の動機づけの特徴を明確にし、男女を比較することで、各々を高める指導の在り方を探索することを目的とする。	自律性欲求尺度、Assumed Competence Scale 2 version (ACS2), 自尊感情尺度、学習動機づけ尺度を使用した量的研究	(1)母性看護学実習前の自律性欲求は、【自己決定】、【独立】ともに男子学生が女子学生を上回っていた。(2)仮想的有能感(自尊感情、他者軽視)は、他者軽視傾向は男子学生が高く、自尊感情尺度の平均も高かった。男子学生は、他者軽視で自尊感情も高いという「全能型」に類型され、女子学生は、他者軽視が低く自尊感情が高い「自尊型」に類型された。(3)学習の動機づけは女子学生が内発的調整・同一的調整・取り入れ調整で高く、「勉強しないと教師に叱られるから」「他人に勉強しろと言われるから」の外部調整のみ男子学生が高かった。これらのことから、男女各々の特徴を理解し魅力ある実習環境をめざし、母性看護学の講義・演習に努めていきたい。また、教員・実習調整者との関係性の安定や母子との対人関係の構築の良否が学生の学習意欲を左右するため、受け持ちケースの選定を慎重に行うことが重要である。さらに、自尊感情や自己決定力を高める学習環境を育む指導方法を今後も教員が意識していく必要がある。
J 贅ら ¹⁵⁾ (2014)	母性看護学実習における男子学生の思い	母性看護学実習に対する男子学生の思いを明らかにし、実習展開の示唆を得る。	半構造化面接により作成した逐語録をテキストマイニングで分析	男子学生9名を対象に特徴表現抽出した結果、実習前は「男性-疎外感」、「実習-行く+したくない」、実習中は「新生児-看護」、「つながり-理解+できる」、「学生-必要」、「看護-経験+できる」、「観察-重要」、実習後は「まじめ-実習+したい」、「育児休暇-取る+したい」、「実習前-意味+ない」、「精神的サポート-必要」、「男性-支える」、「視点-増える」が抽出された。母性看護学実習に対して男子学生は、実習前は性差による疎外感から不安を抱えているが、実習中は対象者とのかかわりを通して、学生にとって必要な経験とらえ、実習後は父親としての将来像についても考えていることがわかった。

表1 研究対象の文献の概要（つづき）

著者/発行年	テーマ	研究目的	研究方法	結果・考察
K 伊藤ら ¹⁶⁾ (2008)	男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察	男子学生への母性看護学実習指導の検討に資することを目的とする。	3年次の男子学生13名の実習記録分析と男子学生が受け持った褥婦へのアンケート調査	男子学生13名の実習記録を分析した結果、男子学生は「実習初日の訪室」「産褥期の変化の観察」「家族とのコミュニケーション」の場面で不安や戸惑いを感じ、教員や指導者に助言を求めていることが分かった。一方、男子学生の受け持ち対象となった褥婦の男子学生の許容度については、本学ではこれまで男子学生においては分娩期から受け持つことで褥婦に受け入れてもらうことができると考え実施してきたが、今回のアンケート調査では、受け持ち対象となった褥婦は産褥期からでも男子学生の学習に協力したい、学ぶ機会を与えてあげたいと考えていることが分かった。
L 小山満子 ¹⁷⁾ (2008)	夫を通して学んだ男子学生の母性看護学実習の学びと夫とともに分娩に立ち会って	夫立ち会い分娩の産婦を受けもった経験のある男子学生について、夫を通して学んだ母性看護学実習の学びを明らかにする。	帰納的記述的方法	母性看護学実習を終了した男子学生6名のデータを分析した結果、夫を通して学んだ母性看護学実習の学びは、【信頼関係に影響した要因】【父性確立に向けた援助】【夫の出産時の役割】【夫の出産後の役割】【男性の立場から深めた母性看護】であった。男子学生は、同性の立場を通して、父性の視点で母性看護学の学習を深めていることが明らかになった。夫立ち会い分娩の産婦を受け持ち、産褥期までをケースとして選択することは、男子学生の学習を深めるために有効な1つの方法と考える。
M 豊田ら ¹⁸⁾ (2001)	男子学生の母性看護学実習指導に関する文献的考察	母性看護学実習で、実習指導を行う上で、工夫した点と配慮した点を検討するとともに実習指導の展開について考察する。	文献研究	母性看護学実習実施に対して、臨床側への配慮、男子学生への配慮が行なわれていることがわかった。臨床側への配慮としては、まず、対象への配慮があり、対象に承諾を得る、男子学生を単独で行動させないなどプライバシー、羞恥心を守ることであった。また、臨床指導者と連携を密にとり、調整を行っていくことなど臨床側への配慮も必要であることがわかった。さらに、看護学生としての意識や態度が、対象の受け入れに影響を与える。そのため、男子学生に対して態度や意識を高めるような働きかけや看護士としての役割を示唆することで、プラスのイメージを持って実習が行えることが明らかになった。今後、充実した母性看護学実習が展開できるよう、男子学生の実習に対する準備状態を高めると共に、実習期間中だけでなく臨床側と継続した密な連携を行っていきたいと思う。
N 斎藤ら ¹⁹⁾ (2001)	男子学生の母性看護学実習実習内容の改善を試みての結果と課題	男子学生の母性看護学実習内容を平成5年度分(A)と平成8年度分(B)の時期において、女子学生との実習内容と比較し、男子学生の母性看護学実習の意義について検討する。	調査研究	男子学生の母性看護学実習内容を平成5年度分(A)と平成8年度分(B)を比較検討した結果、見学についてはAでは妊婦検診の診察助と検査・分娩第1期看護が全てできていなかったが、Bでは他の3項目も含め、全項目の見学が可能となった。一方分娩第4期の実習はBでも実施されていない。女子学生との実習内容の比較では、Aの胎児娩出見学など6項目が男子学生で不可であったがBでは制限はなくなった。また実習も6項目ではBでも男女差はなくなった。ただ、直接的ケアである乳房マッサージなどは未だ男子禁制である。産産婦のアンケートでは男子学生の受持にかなりの抵抗と拒否の傾向がみられた。

1. 母性看護学における男子学生の思い

以下、引用文献の内容に忠実に、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、コード・小カテゴリーを「 」と表記する。

1) 肯定的な思いと否定的な思い

母性看護学における男子学生の思いは、肯定的な思いと否定的な思いが混在していた^{8-13, 15, 17)}。

瀬戸¹²⁾らは、男子学生の実習開始時の心理について、【男性であることを意識した感情】【分娩に対する抵抗感】【母性看護学実習に抱く困難感】【母子の看護に対する不安】【母性看護学実習への期待感】【学生自身の経験からくる肯定的感情】のカテゴリーを抽出した。さらに否定的な思いの中に、《分娩見学への拒否感》《分娩に対する恐怖心・嫌悪感》《母性領域に対する制約感》《妊産褥婦への接し方への不安》があり、肯定的な思いの中に《分娩見学への興味》《女性や子どもに対する好感》《新生児ケアへの意欲》があった。男子学生の実習開始時の心理における肯定的な思いとして、【母性看護学実習への期待感】があった^{12, 13)}（表2）。

表2 母性看護学実習への期待感

G	実習開始時の心理に【母性看護学実習への期待感】があり，《分娩見学への興味》《指導者に対する要望》《新生児ケアへの意欲》《母子や家族への希望》のサブカテゴリーで構成された。
H	学生の準備状態として【母性看護学実習への期待】があり，《新生児のケアは楽しみ》《実習は積極的にしっかり遣りたい》《自分が夫・父になった時に役立つ》等のサブカテゴリーから構成された。

原ら⁸⁾は、男子学生の実習前の思いに【ネガティブな思い】と【ポジティブな思い】があるとし、【ネガティブな思い】には《妊産褥婦と夫に対する思い》、《実習の学びが得られない可能性への不安》、《将来携わらない領域に対する無意味感》、《実習に行くしかない」と割り切る思い》の中カテゴリーがあげられた。【ネガティブな思い】と【ポジティブな思い】のコード比率は、実習前より実習後に【ネガティブな思い】が軽減し、【ポジティブな思い】の割合が増加している結果となった。【ポジティブな思い】には《他領域への母性看護学の活用》《父親になった時の母性看護学の活用》があった。

2) 男子学生に特徴的な母性看護学実習における心理

賛¹¹⁾は、テキストマイニングにより男子学生の思いを表現した。特徴表現抽出では、実習前は「場所－疎外感」「男性－疎外感」「実習－行く＋したくない」があり、実習中は「新生児－看護」「つながり－理解＋できる」「学生－必要」「看護－経験＋できる」があり、実習後は「まじめ－実習＋したい」「男性－支える」「精神的サポート－必要」と報告している。男子学生の思いの特徴的なものに「疎外感」「男性としての自己の存在」「必要性」があった。

実習開始時の男子学生に特徴的な心理について、【男性であることを意識した感情】があり、《対象が若いことによるとまどい》《外性器観察に関連するとまどい》《男性としての立場の意識化》《母性看護学実習を行う上での気遣い》があると報告している¹²⁾。

林ら⁶⁾は、男子学生の母性看護学への興味関心の低さをあげており、「おもしろくない」「苦手意識」「将来の仕事に関係がない領域」「将来に関係ないという想い」があると報告している。

小倉ら¹⁴⁾は、母性看護学実習前の仮想的有能感（自尊感情・他者軽視）と学習の動機づけの調査より、女子学生と比較して男子学生は、母性看護学実習前は、興味・関心が駆り立てられることが少なく、自律性の欲求・有能性の欲求・関係性の欲求能力をもっているにもかかわらずそれを発揮できないことが示唆されたと述べている。また、男子学生は他者軽視傾向が高く、自尊感情尺度の平均も高く、「全能型」に類型される学生が多いため、女子学生と比較して他人のことに関心が薄い傾向があると述べている。また、男子学生は、学習の動機づけの外的調整のみ高いのが特徴で、「勉強しないと教師に叱られるから」や「他人に勉強しろといわれるから」など、やらされているという感覚があり、自分にとって母性看護学実習が必要であるという認識は女子と比較して低いと報告している。

3) 男子学生の不安

男子学生の実習開始時の心理に不安があり、7つの文献^{6, 8, 10-13, 18)}に不安の報告が確認され、表3に示す。

表3 母性看護学実習に関連した不安

A	母性実習のストレス状況の中に《分娩見学への不安》《報告に関連した不安・緊張》があった。
C	中カテゴリー《実習の学びが得られない可能性への不安》は「妊産褥婦に受け入れてもらえない可能性への不安」「男子が看護を提供できるかという不安」「直接観察できないことへの不安」の小カテゴリーから成った。
E	《女性の患者さんを受け持った経験がないからイメージが付かない》、《自分で体験できないからイメージが付かない》ということを理由に【看護の対象としてイメージできないという不安からくる学習への困難感】を抱き、【実習での看護過程についての不安】【男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安】があがった。
F	実習前の不安感について、女子学生では「記録」「新生児」「知識不足」の順で単語が多いが、男子学生では「関わり」「新生児」「関わる＋ない」の順で単語が多い。
G	実習開始時の【母子の看護に対する不安】は《看護過程に対する不安》《妊産褥婦との接し方への不安》《健康な母子をうけもつという違和感》《妊産褥婦との信頼関係構築に対する困惑感》のサブカテゴリーで構成された。
H	学生の準備状態として【性差に関する戸惑いと不安】があり、《女性患者を受け持って傷ついた経験がある》《拒否されると何もできなくなる》《母性実習では性的なものに関わる》《女性の心理は理解できないと思う》《男性が関わってもいいのかわからない》等のサブカテゴリーがあった。
K	男子学生は「実習初日の訪室」「産褥期の変化の観察」「家族とのコミュニケーション」の場面で不安や戸惑いを感じる。

2. 男子学生の困難感

男子学生の困難感は、4つの文献¹⁰⁻¹³⁾で報告されており、大野¹⁰⁾は、男子学生の困難感は、《妊産婦に接したことがないからイメージが付かない》《女性の患者さんを受け持った経験がないからイメージ付かない》など身近な体験がないことを理由に【看護の対象としてイメージできないために感じる学習への困難感】があると述べている。また、男子学生の困難感に、【興味がわからない】【将来の看護師としての自分に関係がない】【男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安】【対象が女性であることに対するやりづらさ】【性差を強く意識した対象の見方】【男性であるがゆえの実習上の制約】と否定的な思いをあげている¹⁰⁾。

額額¹²⁾らは、【母性看護学に抱く困難感】は《母性領域に対する制約感》《母性看護学実習に対する曖昧さ》《既習学生からの否定的な情報提供による先入観》の3つのサブカテゴリーで構成されると述べている。

二川¹³⁾は、男子学生には【性差を越えて関わることの困難さ】があり、《男子学生だから仕方ない》《男子学生には対象の許可が必要》《母性分野は男性には難しい》等のサブカテゴリーで構成されると報告した。

3. 男子学生の学びの特徴

男子学生の学びの特徴として、褥婦自身が男子学生を受け入れても、夫や家族が不安をもち、男子学生が受け持ちをもてないケースがあり、対象からの反応は男子学生の看護介入を100%受け入れるには抵抗がある¹⁹⁾とし、女子学生とペアを組んで対象を受け持つことが多い^{10, 18, 19)}と報告されている。

外来実習は短時間の診察の中で対象とのコミュニケーションが取りにくい場であり、時間的にも男子学生を理解してもらうには、対象の協力が得にくく、妊娠期の目標の達成度が女子学生と比べて差が出やすい領域である¹⁹⁾。

男子学生は、対象に受け入れられないのではないかという学生自身の戸惑いがあり、学生にとって実際の関わりが上手くいくかどうかは、実習の効果に影響を与える大きな要素である。学生自らの実習態度(看護者としての毅然とした態度)と、羞恥心を配慮した対応が対象の受け入れに大いに関与しており、学生自身の誠実な実習態度や対応が、対象との人間関係を結びやすくすると報告¹⁸⁾している。

二川ら¹³⁾は、母性看護学実習における男子学生の学びとして、【性差に適した看護の気づき】があり、《褥婦ケアはできなかったが、もっとやりたかった》のように褥婦へのケアが十分に実施することができず、もっとやりたいという意欲が生じていた。【実践を通して理解した母性看護】の学びには、《新生児の看護を実践して分かった》《自分の父親観が芽生えた》のように、自己の内面に向き合い、新生児から感じたことや夫の役割について深く学んだ学生がおり、【他領域実習への学びの応用】の学びには《今後の看護実習に活かしていける》のように、看護の対象理解を性別の視点・母子や家族を捉える視点・ライフサイクルからの視点より人間理解を深めていた。また、「自分の接し方を振り返ることができた」とこれまでの《自分の人との関わりの振り返り》をすることができていたと報告している。

伊藤ら¹⁶⁾は、男子学生の学びとして、家族とのコミュニケーションをあげており、男子学生が特に意識したのが夫への配慮であり、夫の面会時に訪室を控え、家族の状況や言動を確認しており、支援の対象を家族やサポート可能な周囲の人々にまで視野を広げていた。さらに、同性の立場から、夫と良好なコミュニケーションをとる男子学生もいたと述べている。

小山¹⁷⁾は、夫立ち合い分娩の産婦を受け持った経験のある男子学生の学びは、【信頼関係に影響した要因】【父性確立に向けた援助】【夫の出産時の役割】【夫の出産後の役割】【夫の立場から深めた母性看護】であり、男子学生は夫立ち合い分娩を通し、生命誕生の感動とともに自分を生んでくれた母親への感謝の気持ちを強めていた。父親の心理や役割や父性意識について学びながら、夫に対する産褥期の指導における男同士のメリットまで考えられていたと報告している。

4. 男子学生への教育方法

母性看護学実習における男子学生の指導方法として、坂本らは、実習前には学生自身が自己の課題を明確にして実習に臨めるように支援し、実習中は、比較的関わりに制限が少ない新生児看護において主体的に実習できるように教育的な関わりをする⁷⁾と述べている。

原ら⁸⁾は、今後の教育的関わりとして男子看護学生が【ネガティブな思い】に直面した時、指導者は全てを教授する訳ではなく、学生自身で解決策を導き出せるような関わりが必要である⁸⁾と述べている。また、藤邊ら⁹⁾は男子学生は母性看護実習に不安や戸惑いをもっていたが、肯定的な体験を得られるような調整や指導を行うことで学びを得られると報告している。

大野ら¹⁰⁾は、男子学生が抱く母性看護学実習への困難感への教育支援では、「看護の方向性がみえる」こと、「対象から受け入れられているという安心感」を持つこと、さらに「男性としての自分」に集中しがちな意識を「看護者を目指す者」としての意識へと移行させることが重要と述べている。

さらに二川ら¹³⁾は、男子学生の学習効果を高めるには、学生の性差に配慮した教育的関わりが必要である。実習前には男子学生の情意面を捉えて動機づけにつなげ、妊娠から産褥への流れに沿った実習展開とし、対象との関わりの機会を多くつくることが重要であると報告している。

VI. 考察

文献研究を通して、母性看護学における男子学生の思いと学びの特徴および教育方法について明らかとなった。内容を分析した結果、以下のように教育的関わりについて具体的な示唆を得たので、実習前・実習中・実習後にわけて述べる。

1. 男子学生への実習前の教育的関わり

母性看護学における男子学生の思いは、肯定的な思いと否定的な思いが混在し、否定的な思いは男子学生のモチベーションを低下させる要因として報告^{8, 20)}されていることから、実習前の準備段階で否定的な

思いを肯定的な思いに転換させるような関わりが重要である。

例えば「女性の患者さんを受け持った経験がないからイメージが付かない」、「自分で体験できないからイメージが付かない」ということを理由に「看護の対象としてイメージできないという不安」¹⁰⁾ に対しては、臨地実習前の授業でDVDや写真を多く取り入れリアルな視聴覚教材を駆使し、シミュレーターを活用した技術演習を展開して、既習知識の統合とリアルな看護実践のイメージ化を促進する。母性看護学特有の「報告に関連した不安・緊張」¹⁰⁾ については、観察・看護ケアからアセスメント～報告まで一連のプロセスを主体的に経験し、何度も練習することで、不安を軽減し、技術に自信が持てるようにレディネスを高めていく。

さらに豊田ら¹⁸⁾ は、「男子学生の意識や態度が実習展開に影響するということを、男子学生自身にも意識させるような教員の関わりが必要になってくる」と述べており、教員は学生個人の特性やレディネスを把握するために実習前に学生の意識や態度の準備状態を知り、教員は学生がいつでも話しやすいよう相談できる環境を整えていく。なかには《女性患者を受け持って傷ついた経験がある》《女性の心理は理解できないと思う》《実習は受け身になってしまう》等の【性差に関する戸惑いと不安】¹³⁾ が払拭できない学生もあり、教員は学生個人の特性に合わせて看護チームの一員であるという意識づけを行い、自覚を促す。学生の母性看護学に対する捉え方を理解した上で、個々の学生に合わせて母性看護学実習に臨む姿勢を積極的態度や自ら学ぶ意識へと整えていく。

特に男子学生は、学習の動機づけの外的調整のみ高いのが特徴で、やらされているという感覚があり、自分にとって母性看護学実習が必要であるという認識は女子と比較して低くなる傾向が報告¹⁴⁾ されており、学習の動機づけは重要である。【興味がわからない】【将来の看護師としての自分に関係がない】等の学生¹⁰⁾ には、意識の転換が必要である。自分に関係がない意識をもつと、これが無意識のうちに相手に伝わってしまい、対象者および指導者からの信頼も得にくくなり、実習効果もあがらないことが予測できる。よって、学生自らの誠実な実習態度（看護者としての毅然とした態度）や羞恥心を配慮した対応が対象の学生受け入れ¹⁸⁾ と信頼関係構築に大いに役立つことを十分に説明し、個別にオリエンテーションを行う必要がある。

また、「分娩見学への興味」「女性や子どもに対する好感」「新生児ケアへの意欲」等¹²⁾、期待感が強い男子学生はさらに意欲を伸ばせるように関わり、反対に「分娩見学への拒否感」「分娩に対する恐怖心・嫌悪感」がある男子学生も存在する¹²⁾ ことから、どのような思いがあるかを実習前に確認し、学生個々の特徴に合わせて実習前に準備状態を高めて、学生の実習前・実習中と継続的にアプローチしていく必要がある。

2. 男子学生への実習中の教育的関わり

男子学生は母性看護学実習の当初、程度の違いはあれ、困難感をもっている¹⁰⁾。【男性であることを理由に拒否されるのではないかという不安】【対象が女性であることに対するやりづらさ】【性差を強く意識した対象の見方】【男性であるがゆえの実習上の制約】等の男子学生特有の困難感¹⁰⁾ については、指導者と連携を図りながら、学生の不安や心配を受け止め早期に対処する。実習受け入れがよさそうな対象へ受け持ち可否を打診し、受け持ち対象となる同意を得て、「対象から受け入れられている安心感」¹⁰⁾ をもてるようにし、積極的姿勢へと変化するように働きかける。実際のケアやコミュニケーションでは、指導者や教員が学生と同行し、ロールモデルを示すなどして、実習体験より学生は様々な学びを深めていくことが可能となる環境を整える。

さらに、教員の関わりとしては、実践を通して母性看護の理解が深まるように、指導者と連携し、学生へできるだけ多く実践する機会をつくる。「新生児の看護を実践して分かった」「自分の父親観が芽生えた」のように、看護実践を振り返り、自己の内面に向き合い、看護実践を通して感じ得た、夫の役割や新生児の看護について整理し、学びを深めるよう働きかける。

看護実践は経験するだけに終わらず、その振り返りを行うことが必要で、臨地実習の経験の振り返り、すなわち省察（以下reflection）することは学びを深めるために大変重要である。看護学生のreflectionは自己の気づきや批判的思考が導かれ効果的である²¹⁾ ため、看護実践をreflectionし、洞察を深めるプロセスを通して、既習知識と看護実践の統合ができるように支援する。

【他領域実習への学びの応用】は《今後の看護実習に活かしていける》ように¹³⁾、看護の対象理解を性別の視点・家族を捉える視点・ライフサイクルからの視点より、全人的にとらえて、人間理解を深めることが重要であると考ええる。さらに、看護学生にとって「自分の接し方を振り返ること」は学びの応用へつなげるために大変重要である。

夫立ち合い分娩の産婦を受け持った経験のある男子学生の学び¹⁷⁾ は、【信頼関係に影響した要因】【父性確立に向けた援助】【夫の出産時の役割】【夫の立場から深めた母性看護】があり、看護実践の振り返りから、父親の心理や役割・父性意識について全人的にとらえて、人間理解を深めていた。また、これまでの《自分の人との関わりの振り返り》¹³⁾ をじっくりと行い、意味づけることができおり、看護職として自己の成長に繋げていた。

3. 男子学生への実習後の教育的関わり

男子学生の学びを促進するために、実習後も看護実践を振り返り、教育的関わりを継続する。自己の看護実践にとどまらず、指導者の看護実践の意味づけも含め、《自分の人との関わりの振り返り》¹³⁾ をじっくりと行い、意味づけすることで、実習体験より学生の学びを深めていくことができると考えられた。

VII. 結論

1. 母性看護学における男子学生の思いは、肯定的な思いと否定的な思いが混在し、否定的な思いは男子学生のモチベーションを低下させる要因となることから、実習前の準備段階で否定的な思いを肯定的な思いに転換させるような関わりが重要である。
2. 実習中・実習後の学修を促進する教員の関わりとして、指導者と連携して、男子学生が実践を通して母性看護の理解が深まるように、環境を整える。教員は男子学生とともに看護実践を振り返り、自己の内面に向き合い、看護実践を通して感じ得た学びが深まるように働きかける。

利益相反

本研究における利益相反に相当する事項はない。

引用文献

- 1) 日本学術会議:大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準, 看護学分野, 日本学術会議ホームページ, <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170929-9.pdf> (2024.10.10 21:00 アクセス)
- 2) 高橋順子, 高野みち子, 雑賀美智子 (2010) 女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難－看護専門学校三年課程の看護学生の記述内容分析から－. 四国大学紀要. 33, 161-168.
- 3) 村井俊介, 高橋ゆかり (2005) 男子学生の母性看護学実習における困難－今後の母性実習の在り方を考える－. 茨城県母性衛生学会誌. 25, 67-71.
- 4) 荒川直子 (2008) 母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難. 第38回日本看護学

会論文集（看護教育）. 123-125.

- 5) 市川裕美子, 佐藤真由美, 坂本弘子 (2013) 男子看護学生が感じている学習上の困難の内容. 八戸短期大学研究紀要. 36, 77-85.
- 6) 林陽子, 吉岡詠美, 金子さゆり (2021) 我が国の母性看護学実習における看護学生のストレスに関する文献検討. 長野県看護大学紀要. 23, 23-36.
- 7) 坂本保子, 藤邊祐子, 高橋雪子 (2019) 男子看護学生の母性看護学実習における現状と教育的な関わりに関する文献検討. 八戸学院大学紀要. 59, 13-19.
- 8) 原理沙, 奥原香織, 横山芳子 (2019) 男子看護学生の母性看護学実習に対する思いと学びの調査. 松本短期大学研究紀要. 13-24.
- 9) 藤邊祐子, 坂本保子 (2019) 母性看護学において男子学生が肯定的にとらえた体験. 八戸学院大学紀要. 57, 143-149.
- 10) 大野理恵, 長鶴美佐子 (2018) 男子学生が抱く母性看護学実習に対する困難感の変化の様相と影響する要因. 宮崎県立看護大学研究紀要. 18(1), 1-14.
- 11) 贅育子 (2018) 母性看護学実習において学生が抱く実習前の不安感, 実習中の困難感, 実習後の成長感と事前学習課題の理解度および有効性から考察した効果的な学習支援. 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌. 3, 1-10.
- 12) 瀬瀬祐子, 中田久恵, 大槻優子 (2017) 男子学生の母性看護学実習開始時における心理状態に関する研究. 日本医学看護学教育学会誌. 26(1), 22-26.
- 13) 二川香里, 松井弘美, 長谷川ともみ (2015) 男子学生の視座から捉えた母性看護学実習における学習過程. 母性衛生. 55(4), 659-667.
- 14) 小倉由紀子, 谷口美智子 (2014) A大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較. 中京学院大学看護学部紀要. 5(1), 17-26.
- 15) 贅育子, 小幡孝志, 室津史子 (2014) 母性看護学実習における男子学生の思い. ヒューマンケア研究学会誌. 5(2), 29-36.
- 16) 伊藤千恵, 松井幸子, 大野絢子ほか (2008) 男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察. 群馬パース大学紀要. 6, 81-89.
- 17) 小山満子 (2008) 夫を通して学んだ男子学生の母性看護学実習の学び 夫とともに分娩に立ち会って. 看護総合科学研究会誌. 11(1), 39-47.
- 18) 豊田裕美子, 岡永真由美 (2001) 男子学生の母性看護学実習指導に関する文献的考察. 神戸市看護大学紀要. 5, 73-79.
- 19) 斎藤祥乃, 後藤幸代 (2001) 男子学生の母性看護学実習の一考察 実習内容の改善を試みての結果と課題. 母性衛生. 42(1), 30-241.
- 20) 佐藤愛, 高橋由美子, 寄本飛鳥 (2018) 母性看護学での男子看護学生のモチベーションに影響する要因. 青森県立保健大学雑誌. 18, 15-22.
- 21) 松永麻紀子, 前田ひとみ (2013) 臨地実習のリフレクションから導かれた看護学生の気づきと批判的思考態度に関する研究. 日本看護学教育学会誌. 23(1), 43-52.

2024年12月11日 受理
SBC東京医療大学研究紀要第19号